

## コリオラヌス伝説考

安井 萌\*

(2013年9月30日受付, 2013年12月17日受理)

### I. 物語の内容構成

初期ローマ史を形作るさまざまな諸伝説のうちの一つに、コリオラヌス伝説がある<sup>1)</sup>。勇敢で誇り高きローマ人貴族コリオラヌスをめぐるこの悲劇的な物語は、後世シェークスピア劇の題材とされたことでもよく知られている。伝説を伝える古代の史料としては、リウィウス、ハリカルナッソスのディオニュシオス、プルタルコス的主要三史料<sup>2)</sup>の他、ウェアリウス・マクシムス、カッシウス・ディオ、フロルス、アッピアノス、アウルス・ゲッリウスなどのより簡略ないし断片的な記述があるが、いずれにおいても全体的な話の筋立ては完全に共通している。すなわち、「コリオラヌス(コリオリの征服者)」の異名をもつ勇者グナエウス(ガイウス)・マルキウス<sup>3)</sup>が民衆の不興を買い、国外へ亡命を余儀なくさせられる。かつての敵のもとに身を寄せた彼は、並々ならぬ復讐心を胸に、敵軍を率いて故国に攻め上るが、母や妻の懇願に動かされ兵を引く、というものである。

諸史料の中で最も古いのはリウィウスとディオニュシオスだが、両者にあって伝説はすでに完成された形で提示されている。二人が一致して語る話の展開をいま少し詳しく示すと、以下の通りである。

- ①共和政の開始後間もないある年、ローマ人は近隣の都市コリオリを攻める。この戦いでマルキウスは獅子奮迅の活躍をし、味方を勝利へ導く。大いに名を上げたマルキウスは、以後「コリオラヌス」の添え名でもって呼ばれるようになる。
- ②ローマで深刻な食糧危機が発生し、穀物の調達のため各地へ人が送られる。その結果シキリアより大量の穀物が届けられるが、頑固な貴族主義者であるコリオラヌスはこれを無条件で平民に安く売り渡すことに反対する。
- ③民衆はこのことを知り激怒する。護民官の提唱で民会裁判が開かれ、コリオラヌスに対し有罪判決が下される。コリオラヌスはローマ人の敵であるウォルスキの有力者アッティウス・トゥリウス(トゥルス・アッティウス)のもとに身を寄せる。
- ④おりしもローマでは、以前開催されたユピテルのための大祭(大競技会)があらためてやり直されようとしていた。ユピテルがティトゥス・ラティニウスなる者の夢枕に立ち、これを命じたからである。ちょうど休戦中であつたウォルスキの人々も祭りを見物するため大勢ローマの町に集まる。だが元老院は彼らに退去を命じる。この出来事をきっかけにロー

---

\* 岩手大学教育学部

マ人とウォルスキの間で戦いが再開する。

- ⑤コリオラスス率いるウォルスキ軍は破竹の勢いで進撃、近隣諸都市を次々と攻略し、ローマの町へ迫る。ローマ人はすっかり戦意喪失し、和平を求めて何度もコリオラススに使節を送る。だが彼はこれをことごとくはねつける。
- ⑥ローマ人の女たちが自発的に集まり、和平を乞うためコリオラススの陣営を訪れる。その中には彼の母ウェトゥリアや、幼い二人の息子を連れた妻ウォルムニアも含まれていた。彼女たちの懇望に心揺さぶられ、彼はついに軍を撤退させる。
- ⑦その後ローマでは、女たちの功労を賞し、フォルトゥナ・ムリエブリス（女性の幸運）神殿が建てられる。
- ⑧マルキウスは撤退後、亡命先で不運な最後を遂げる。

これは、英雄の栄光と失脚、祖国への復讐というメイン・ストーリーに加え、ローマ人とウォルスキの争い、貴族と平民の身分対立、食糧危機、民会裁判、大競技会のやり直し、女たちの戦争への介入とフォルトゥナ・ムリエブリス神殿の創建など、多様なモチーフが結合した、かなり複雑な内容構成を持つ物語となっている。なるほど物語のさらに詳細まで見てゆくと、両史家の記述には多々違いも見受けられる。いくつか目につく事例を以下に掲げよう<sup>4)</sup>。

	リウィウス	ディオニュシオス
(1)コリオラススの個人名	グナエウス (2.33.5)	ガイウス (6.92.3)
(2)コリオラススは裁判に出席したか?	欠席 (2.35.6)	出席 (7.59-64)
(3)ローマを退去させられたウォルスキが参集した場所	「フェレンティナの水の源にて」 (2.38.9)	「都市（ローマ）から遠くない場所」 (8.4.1)
(4)コリオラススの進軍経路	キルケイ→サトリウム→ロングラ→ポルスカ→コリオリ(→ムギラ)→ラウィニウム→コルピオ→ウェテリア→トレリウム→ラビキ→ペドゥム→ローマ近郊(クルウィリウスの溝) (2.38.9)	キルケイ→トレリウム→ボラ→ラビキ→ペドゥム→コルピオ→コピオラニ(?)の町→ボウィラエ→ラウィニウム→ローマ近郊(クルウィリウスの溝) ロングラ→サトリウム→エケトゥラ→ケティア(セティア?)→ポルスカ→アルピエタエ(?)→ムギラ→コリオリ→ローマ近郊 (8.14-36)
(5)コリオラススの死	「この出来事がもたらした憎悪の下であえぎながら死んだとされる。その死に方については、いろいろな人が異なった具合に伝えている」 (2.40.10)	アッティウスによる謀殺 (8.57-58)

こうした差異の要因の一部は、史家自身に帰されるであろう。例えば表の(4)を見ると、コリオラヌスの進軍はディオニュシオスにあっては二度にわたり繰り広げられるのに対し、リウィウスでは一度となっている。これはおそらく、典拠に記された二度の進軍を後者が簡略化し、ひとまとめに描いたためと思われる<sup>5)</sup>。もう一つの要因は、伝承内にすでにあった諸説並立である。例えばコリオラヌスの死に方について、リウィウスは多様な伝えがあると証言している(表の(5))。実際、ディオニュシオスがアッティウスによる謀殺説に基づき叙述しているのに対し、リウィウスはこの英雄が不遇のまま生き長らえたとするファビウス・ピクトルの説を紹介している(Liv.2.40.10-11)。この他、コリオラヌスの個人名の違いや(表の(1))、また簡潔なリウィウスの記述にのみ現れ、より饒舌なディオニュシオスの方には現れない地名(表の(2))「フェレンティナの水の源」、(4)「ウェテリア」なども、こうした伝承のヴァリエーションに由来するかもしれない。

いずれにせよしかし、これらの差異は結局どれも細部にかかわるにすぎない。先に述べた通り、全体的な物語の内容構成においてリウィウスもディオニュシオスもほとんど変わりはない。おそらく彼らが史書を書いた時点で、この部分に根本的な改変を加える余地はほとんどなかったのだと思われる。遅くとも両史家が活躍した前1世紀後半までの間に、コリオラヌス伝説はほぼ完成を見ていたのである。

## II. 物語の「新しい層」

では、コリオラヌス伝説はいつどのように成立したのか。リウィウスの証言によると、ローマ最初の歴史家ファビウス・ピクトルはすでに英雄の死に言及していたとされる(先述)。ここから、ローマで歴史記述が始まった前3世紀末において、少なくとも伝説の原型は存在していたことがわかる。もちろんこのことは必ずしも、前1世紀後半の史家たちが目にしたような物語が早くも当時出来上がっていたことを意味するわけではない。物語の複雑な内容構成は、長い年月をかけて徐々に形成されたと考えられるからである。コリオラヌス伝説の成立について考えるにあたっては、したがって物語をすべて一体的ではなく、構成要素ごとに見てみる必要がある。その際あらかじめ認識しておくべきなのは、これら諸要素の中には物語の「古い層」に属するものと「新しい層」に属するものがある、ということである。前者は、ローマで歴史記述が開始する前より主に口頭伝承を通じ形作られた、伝説のいわば幹の部分であり、後者は、歴史記述が始まってのち主に文字媒体を通じ追加されていった枝葉の部分である。以下の議論では、このうちまず「新しい層」の中味を瞥見したのち(本章)、続いて「古い層」の考察に進むこととしたい(III・IV)。

### ①大競技会のやり直し

物語では、大競技会の「やり直し (instauratio)」<sup>6)</sup> がコリオラヌスにローマ進軍の恰好の機会を与えたとされる。このやり直しが行われるに至った経緯について、リウィウスとディオニュシオスはおおよそ次のような話を述べている。先般競技会が開かれたおり、開会直前にある市民が町中で自分の奴隷を鞭打ちながら追い立てて行くという珍事が起きた。これを不快に思ったユピテルは、ティトゥス・ラティニウスなる農夫の夢の中に現れ、遺憾の意を人々に伝えるよう命じた。ところがラティニウスは行動をためらったため、その後次々と災難(息子の急死や自らの重病)に見舞われた。彼はついに元老院議場へ赴き、事の次第

を知らせた。かくして、元老院は盛大な祭りをあらためて催すべきことを決議したという(Liv.2.36;Dionys.7.68-69,73.5)。

この奇談めいた話には、しかしながら両史家が語るのとは若干違った伝えが他に存在する。「ローマ建国から474年後のこと、アウトロニウス・マクシムスという者が、鞭打たれ枷をはめられた自らの奴隷を追い立て、見世物が始まる前の競技場の中を通り抜けていった。これに怒ったユピテルは、アンニウスという者に対し夢で、『かくも残酷に満ちた行為は余の好むところではない』と元老院に伝えるよう命じた。だが彼はこのことを黙っていた。そこで彼の息子を突然の死が襲った。しかしこの第二の警告ののちにも黙っていたため、今度は彼自身急に体が不自由になった。そこでついに彼は友人たちの助言に従い、元老院まで担架で運ばれ話をした。すると話を終えるやいなや、たちまち健康を回復し、彼は自分の足で元老院議場を後にしたのである。こうしたわけで、ユピテルを宥めるため、元老院決議とマエニウス法によりその競技会にさらに一日が追加された。」(Macrob. Sat.1.11.3-4)

5世紀の作家マクロビウスが伝えるこの話は、先述のものと二つの点で異なっている。農夫の名前がラティニウスではなくアンニウスであり、また年代も前5世紀初め(リウィウスらの年代設定によれば前490年)ではなくローマ建国から474年後、つまり前279年(ないし前280年)<sup>7)</sup>となっているのである。R・M・オグルヴィは、こちらこそが伝承のより古いヴァージョンであるとし、その主要な論拠としてアンニウスが前4世紀半ば以来有力な平民家系の名前であるのに対し、ラティニウスの名が現れるのはようやく前2世紀になってからであることを挙げる<sup>8)</sup>。確かに、この他マエニウス法という具体的な法律名に言及がなされていることや、何よりこの証言が前世紀までと比べ格段に歴史性を増す前3世紀に関わるものであることが、決定的にとまでは言えないにせよ、ある適度彼の主張を補強するように思われる。これが信頼の置ける情報源に基づく証言である可能性は大きい<sup>9)</sup>。

かたやもう一つ考慮に入れるべき関係史料として、次のようなキケロの一節がある。

「あらゆる歴史家たち、つまりファビウスやゲッリウス、だがとりわけコエリウスがこのような話を〔伝えている。〕ラテン人との戦争の最中、誓約に基づく大競技会(ludi votivi)が初めて開かれたおり、市民たちはにわかに関戦へと召集された。そこで、競技会が中断されたので、これをあらためてやり直すことが決められた。人々がすでに着席し、まさに競技会が始まろうとしていた時である。一人の奴隷が鞭打たれ、枷を身に帯びながら、競技場の中を引き回された。その後、あるローマ人の田舎者が寝ていて夢を見た。そこに何者かが現れ、『競技会の先導者は余の気に入らなかった』と言い、『このことをお前は元老院に告げ知らせよ』と命じたのである。だがこの田舎者は、これをあえて行おうとはしなかった。」(Cic.div.1.55)

キケロによると、グナエウス・ゲッリウスやコエリウス・アンティパテル(ともに前2世紀後半)のみならず、彼らより1世紀前のファビウス・ピクトルもまたこの話題に触れているらしい。しかもその時代設定は、「ラテン人との戦争」の文句から前3世紀より前だったことがわかる。この点についてより詳しい情報を教えてくれるのが、ディオニュシオスである。彼は、ユピテルの不興を買い、やり直しを余儀なくさせられた競技会とは、レギルス湖畔でのラテン諸都市との戦い(史家の年代設定では前496年)を指揮したアウルス・ポストゥミウスが誓約し、戦後実施したものであるとする<sup>10)</sup>。そして典拠として特にファビウスの名を挙げた上で、

この競技会の様子を詳しく描いている (Dionys. 7.71)。ディオニュシオスはここで、ただファビウスがポストゥミウスの競技会について書いていることを証言しているにすぎない。だがこの証言から、前掲のキケロの一節における「初めて開かれた」「誓約に基づく競技会」とはポストゥミウスの競技会に他ならないこと、ひいてはファビウスはこの競技会のやり直しについても言及しているに違いないことが明らかとなる。

こうしてマクロビウスとキケロの二つの史料を合わせ考えると、次のような結論が導かれるだろう。すなわち、まず伝承の核には前279年(ないし前280年)に起きた何らかの史実があったと思われる。その史実がまさにマクロビウスが伝える通りのものだったかどうか、定かではない。ともかくこの出来事はその後同じ世紀のうちに脚色され、共和政初期の時代へと遡らされた。おそらくこれを行った張本人はファビウス自身であろう<sup>11)</sup>。ファビウスは、誓約に基づく競技会を初めて開催したのは有名なレギルス湖畔の戦いの勝利者アウルス・ポストゥミウスであるとして、その祭典の様子を詳しく描いた。これとのつながりで、彼は競技会のやり直しの慣行の起源もまた、この最初の競技会に結び付けたのだと思われる。さて、そこで疑問になるのは、彼がさらにこの話をコリオラヌス伝説と関連づけるところまで行ったかどうかである。彼が両方の話題を扱っていることは確かであり、その可能性は否定できない。ただ、競技会のやり直しの話は、コリオラヌスの物語を構成する諸要素の中では内容的に本筋からかなり離れたものである。一般的に考えて、歴史記述が始まった最初の時点でこれが早くも物語に組み入れられたとすることは、疑問の余地が大きい。少なくともキケロやディオニュシオスの証言はそうした推論を裏づけられないことを、ひとまず確認しておきたい<sup>12)</sup>。

## ②食糧危機

伝えによると、コリオラヌスが失脚するに至るきっかけは食糧危機だったとされる。G・デ・サンクティスは、物語のこの部分は伝承の古い要素に違いないとする<sup>13)</sup>。確かに、共和政開始直後の穀物不足、各地への使節派遣、シキリアよりの穀物の到来といった記事が、大神祇官年代記などの公的記録に基づく信頼すべき情報であることは、十分考えられる<sup>14)</sup>。なるほどシキリアよりの穀物到来に関しては、いささか時代が早すぎる印象を与えるかもしれない。だが同じ頃、豊作を司るギリシアの神々、デメテル、ディオニュソス、コレの三神を宥めるため、ケレス・リベル・リベラ神殿の建立が誓約され(前496年、奉献は前493年、Dionys.6.17.2,94.3)、その造営事業にはギリシア人芸術家ダモピロス、ゴルガソスらが関与したとも言われる(Plin.n.h.35.54)。こうした伝えは、当時におけるローマと南イタリアないしシキリアのギリシア世界との交流を示唆している。早い時期ながら、ローマ人が非常時にシキリアまで穀物調達の範囲を広げた可能性はありうるだろう<sup>15)</sup>。

このように、伝説に描かれた食糧危機は全体として史実の反映と見なしてよいように思われる。しかしそのことは(デ・サンクティスが言うように)この史実と物語との結合もまた古くに遡ることを、必ずしも意味しない。物語においてコリオラヌスは、穀物の安価な供給に反対したため民衆の怒りを買ったとされる。だが公費で調達した穀物を安く配給する政策は、周知のごとくガイウス・グラックスの穀物法(前123年)により初めて導入され、以後ローマ人政治家どうしの激しい対立をもたらした問題である。物語にはまぎれもなくこうした後世の状況が強く投影されている。英雄の失脚に食糧問題が絡む筋立ては、前2世紀末よりあとに形作られた疑いが濃厚である。

## ③コリオラス裁判

コリオラス裁判に関するリウィウスとディオニュシオスの記述は、詳しさの度合いにおいて違いはあるが、内容的に本質的な違いは見られない。両者ともに同種の典拠に基づくと考えて差し支えないと思われる<sup>16)</sup>。ここでより詳細なディオニュシオスの記述に拠りながら、この裁判をめぐる（いささか込み入った）話の展開をまとめると、以下の通りとなる。コリオラスが穀物分配に関し民衆に厳しい態度を示すと、怒った護民官シキニウスは彼を逮捕しようとする。だが貴族たちの妨害に遭い、不首尾に終わる（Dionys.7.26）。翌日シキニウスはさらにコリオラスをタルペイアの岩から突き落とすよう指令を出す。だがまたしても平民と貴族が衝突し、もみ合いとなる（7.35）。混乱を恐れた護民官は、あらためて日を設定しコリオラスを反逆罪で裁くための民会を開くこととする。これに対し時のコンスル、マルクス・ミヌキウスは、裁判民会を開くにあたっては慣例に従い元老院の承認を得るべきと主張し、シキニウスもこれに同意する（7.36-39）。次の日、元老院で賛否両論の末、裁判の開催が認められる（7.39-58）。第三市日（24日後）に裁判が開かれると、まず民会の構成をトリブス単位とするかケントゥリア単位とするかをめぐり争いが起こる。結局護民官が主張するトリブス単位の構成が選ばれる（7.59）。弁護士ミヌキウスと告訴者シキニウスに続き、被告のコリオラス自身が弁論を行う。その雄弁に民衆は心打たれ、彼に同情的となる。だがその時護民官の一人デキウスが立ち上がり、戦利品の詐取という新たな罪状を持ち出して被告を糾弾する（7.60-63）。これにより場の雰囲気は一変する。投票の結果コリオラスは有罪となり、永久追放の判決が下される（7.64）。

以上のようなコリオラス裁判をめぐる話の仔細は、その多くが共和政末期の状況の反映であると見なすことができる。①護民官による逮捕・拘禁は、初期について知られる事例はいずれも信憑性が疑われる。歴史的に確実なのは、前151年と前138年に徴兵を免れようとした市民を助けるため護民官がコンスルを捕らえたというのが最初である。以後こうした行為は、共和政末期の政治的混乱にあって何度か繰り返されることとなる（前2世紀末から前1世紀前半にかけて、未遂を含め9例知られる）<sup>17)</sup>。②カピトリウス丘のタルペイアの岩から罪人を突き落とすのは、十二表法にも記された古い処刑方法であり（第8表23）、共和政中期においても外人や脱走兵などを対象に行われたことが確認されるが（Liv.24.20.6 [前214年], 25.7.13 [前212年]）、護民官がこれを用いるようになるのは前2世紀後半になってからである。前131年ガイウス・アティニウスが自らの元老院入りを拒んだケンソルのカエキリウス・メテルスをこの刑罰で脅したというのが、最初の知られる事例である。こののち前91年にリウィウス・ドルルスが、また前86年にポピリウス・ラエナスが政敵に向けて同様の威嚇を行っている（後者は実際処刑を実行するに至った）<sup>18)</sup>。③元老院による民会裁判開催の事前承認、および民会の構成単位をめぐる議論は、前88年のスラの立法を連想させる。すなわち、同年スラはローマを制圧しマリウス派をいったん駆逐したのち、民会権力を抑制するための二つの法律を成立させた。元老院による法案の事前承認と、トリブス民会に代えてケントゥリア民会を用いるよう定めた法律である（App.b.c.1.59）<sup>19)</sup>。④スラ期まで、裁判で下される罰は死刑か罰金のどちらかであった。追放刑が正規の刑罰として法律に明記されたのは、前63年の「不正選挙に関するトゥリウス法」が最初である<sup>20)</sup>。⑤コリオラスに敵対する護民官シキニウスとデキウスは、共和政末期に活躍したポプラレス（民衆派）の護民官グナエウス・シキニウス（前121年）、マルクス・デキウス（前76年）と同名である<sup>21)</sup>。後者はガイウス・グラックス派の

大量粛清を行ったルキウス・オピミウス（前122年コンスル）を告訴したことで知られ、前者はスラの死後護民官権限の回復を図った主導者の一人である。

こうして見ると、コリオラヌス裁判に関するディオニュシオス（およびリウィウス）の記述は、大方前2世紀後半以降に生み出されたものと考えられる。そこには、とりわけスラ期およびその一世代前の政治状況が色濃く映し出されている。もちろんコリオラヌスが何らかの罪（反逆罪か戦利品詐取の罪）で亡命に追いやられたという基本的な筋立ては、より古い伝承の要素であるに違いない。だがそこに貴族と平民の対立のモチーフが加味され、コリオラヌスが煽動的護民官の血祭りに上げられる話へと発展するのは、伝説形成のかなりあとの段階においてではないかと思われる。リウィウスやディオニュシオスの身分闘争の記述には、いわゆる後期年代記作家の脚色を帯びた部分が少なくない<sup>22)</sup>。コリオラヌス裁判の箇所についても、大方そのようなことが言えそうである。

### Ⅲ. 物語の「古い層」——フォルトゥナ・ムリエプリス神殿起源譚

コリオラヌスの物語の中で最も劇的であり、古来人々の心を大いに引きつけてきたのは、英雄とその母・妻の対面の場面であろう。復讐に凝り固まった猛将の頑なな気持ちを女たちが解きほぐし、融和へと導く話は、物語のクライマックスであるとともに、その筋立ての不可欠の部分となす。したがってそれが比較的早い時期に伝説に組み入れられた、いわゆる「古い層」に属する要素であることは、おそらく間違いないだろう。ただし女たちの活躍の話は、そもそもコリオラヌス伝説の一部として形作られたものではなかった。それは当初フォルトゥナ・ムリエプリス神殿の起源譚として成立し、あとから英雄伝説に結合したのであると考えられる<sup>23)</sup>。ならばコリオラヌス伝説に現れる女性たちの物語は、フォルトゥナ・ムリエプリス信仰よりいったいどのようにして生じたのか。以下ではこの問題を中心に考察を行いたい。

伝承によると、コリオラヌス率いるウォルススキ軍が撤退したのち、ローマ人は女たちの功労を賞して、敵軍が引き返した場所、すなわちクルウィリウスの溝付近にフォルトゥナ・ムリエプリスのための神殿を建設することを決議する。これを受けて女たちは、同神殿で祭儀を行う最初の祭司としてウァレリアを選ぶ。ウァレリアは彼女らをコリオラヌスのもとへ懇願に赴くよう仕向け、その集団を先導した人物であった<sup>24)</sup>。前487年の12月1日、つまり敵軍が撤退したちょうど一年後に、女たちは神殿が建設される予定地で最初の祭儀を行った。翌年神殿は完成し、7月6日に奉献された（Dionys. 8.55.Cf.Plut.Cor.37. リウィウスの記述はきわめて簡素である、Liv.2.40.12）。ところで、その際驚くべきことが起きたと言われる。国費で作られた神像に加え、女たちは自らの負担でもう一体の像を作ったが、これが安置後二度にわたり次のような言葉を発したというのである。「女たちよ、お前たちは私をふさわしいやり方で与え、ふさわしいやり方で捧げた」と（Dionys.8.56;Plut.Cor.37-8;Val.Max. 1.8.4 et al.）。歴史時代におけるフォルトゥナ・ムリエプリスは比較的マイナーな存在だったらしく、史料の言及はそれほど多くない。大部分は、以上のようなコリオラヌス伝説とのかかわりで述べられるものばかりである。同神の実体はそうしたわけで謎に満ちているが、しかし基本的な事実としてひとまず次の二点が指摘されてよいのではないかと思われる。

(1)物語では、フォルトゥナ・ムリエプリス神殿はローマ市より5マイル離れたクルウィリウスの溝付近に建てられたとされる。だが、ウァレリウス・マクスィムスならびにフェストゥ

スの証言より、実際それはラテン街道上4マイルの位置にあったことが確認される (Val. Max.1.8.4;Fest.p.282L)。おそらくこの場所は、かつてのローマ領域の境界だったと思われる。このことは、古くからローマでは国境付近に神殿が置かれたり、またもろもろの祭儀が行われたりしたことから推測できる。そうした事例を二三掲げよう。

- ・その名も「境界」を意味するテルミヌス神のため、毎年2月23日にテルミナリア祭が催された。祭儀が行われた場所は、ラウィニウムとの間を結ぶラウレンティウム街道上6マイルの位置にあった (Ovid.Fast.2.679-82)。
- ・ストラボンによると、アンバルウァリア (田園めぐりの祭り) の日に祭司は複数の国境地点において犠牲を捧げた。そのうちの 하나가、ローマ市より5番目と6番目の里程標の間にある「フェスティ」と呼ばれる場所であったとされる (Strab.5.3.2)。
- ・ローマと約10マイル離れたボウィラエの間のアッピウス街道上に、正確な位置は不明だがマルス神殿があった。前295年と前292年の二度にわたる工事でこの街道はボウィラエまで舗装されたが、その際一度目にまずマルス神殿まで舗装されたという事実から (Liv.10.23.12,47.4)、A・アルフェルディは同神殿がローマの旧国境をなしたと推定する<sup>25)</sup>。

フォルトゥナ・ムリエプリスは、ラウレンティウム街道のテルミヌスやアッピウス街道のマルスなどと同様、境界に祀られた神であると言える<sup>26)</sup>。なるほど、前5世紀初めにおいてローマ領域はすでにラテン街道の4マイルをはるかに越えていたと思われる。それゆえもし同神殿が本当に前488年に奉獻されたのであれば、それは当時もはや厳密な意味での国境の神殿とは言いがたかったかもしれない。だがラテン街道上の旧国境地点には以前から何らかの宗教施設 (祠) が置かれていたはずである。前5世紀初めに建てられたのは、この古来の施設を引き継ぐものだったと考えてよいと思われる。

(2)フォルトゥナ・ムリエプリス神殿には二体の神像が収められていたとされる。その姿かたちがどのようなものであったか、直接的な史料証言は残されていない。ただ、これらがアンティウムのフォルトゥナ像と密接な関係を有する可能性を、つとにW・オッターが指摘している<sup>27)</sup>。ローマの南約50キロの都市アンティウムに祀られたフォルトゥナは、古来託宣の女神としてよく知られた。それは諸種の史料に言及され、しかも多くの場合複数形で表されている (e.g.Mart.5.1.3「真実を語る姉妹」;Suet.Cal.57;Tac.ann.15.23,etc. 碑文史料にもまた同様の表記が見られる、CIL,X,6555,6638)。このことから、同神もやはり複数の像よりなったことが推測される。きわめて幸運にも、この神像を写したと思しき貨幣の図像が残されている。それは当地出身のクイントゥス・ルスティウスが前19年頃に発行した二種類の貨幣、アウレウス金貨とデナリウス銀貨である<sup>28)</sup>。いずれも表面に二体の女性像が刻されており、その脇にはそれぞれ、前者では‘FORTVNAE’、後者では‘FORTVNAE ANTIAT[ES]’の文字が見える。注目されるのは、これらの二体の像が互いに異なる風体をしていることである。すなわち一方が頭をすっぽりと兜で覆われているのに対し、もう一方は王冠を身につけているのである。もしこの貨幣の図像が女神像を再現したものであるなら、アンティウムのフォルトゥナは一つが武装した姿で、もう一つが平服姿だったことになる。G・ヴィッソヴァは、こうした理解に二つの理由から疑念を呈している。まずルスティウスのデナリウス銀貨には別種の型があり、そこでは二体の女性像が同じ姿で描かれていること、またホラティウスの詩篇 (Carm.1.35) に詠われる同神は一般的な運命神 (Tyche = Fortuna) のイメージそのものであること、である<sup>29)</sup>。だ



がこれらの根拠はさほど強固なものとは言えない。問題の別種の貨幣は、貨幣学的見地からは一般に後世のルスティウス貨幣の模倣と考えられているし<sup>30)</sup>、またホラティウスの詩に関して言えば、詩人がここでアンティウムのフォルトゥナの特性をどれほどよく認識し、それを反映した形で詠っているかどうか、疑問が残るからである。さて、ローマ人の間には元々男女神の対はありえても、同じ神に複数の像を並置する発想はなかった。そうした彼らがフォルトゥナの像をあえて二体制作することとなったのには、アンティウムの先例が少なからぬ影響を及ぼしたに相違ない<sup>31)</sup>。もちろんフォルトゥナ・ムリエブリス像がどれほどアンティウムのフォルトゥナ像を手本に作られたかは明らかでない。だがローマ人は後者の二つの像に違いがあることを当然知っていたはずである。にもかかわらず、もし彼らが自分たちの二体のフォルトゥナ像を（アンティウムの先例とは異なり）同じような意匠で作ったとすると、そちらの方がむしろ不自然なことに思える。

以上述べた二つの事実より、フォルトゥナ・ムリエブリスの基本的性格がある程度見えてくるように思われる。国境に祀られる神やそこで行われる祭儀には、境界の防衛とともに豊饒・多産祈願（これはアンバルヴァリアの場合に明瞭に見て取れる）<sup>32)</sup>の意味合いが込められていた。一方、同神の神像制作に影響を与えたアンティウムのフォルトゥナもまた、戦時と平時の二領域にまたがる神であった。こうした二重の属性は当然フォルトゥナ・ムリエブリスにも備わっていたと考えるべきだろう。すなわちそれは、主として子を産む者たる女性の保護ならびに国家の安全という、二つの分野を司る女神だったと推定されるのである。さて、この点を踏まえた上で、続いてはフォルトゥナ・ムリエブリスとコリオラスの物語で語られる女性たちの活躍の話との関係について見ていきたいと思う。

考察の一つ目の手がかりは、コリオラスの妻と母である。Th・モムゼン以来の古典的解釈によれば、妻ウォルムニアと母ウェトゥリアの名は実在するローマ人氏族名（ウォルムニウス、ウェトゥリウス）に由来するとされる<sup>33)</sup>。これに対しJ・ガジェは、女たちの名前は氏族名ではなく、フォルトゥナ・ムリエブリス信仰と関連した宗教的意味合いを持つものだと考える。すなわち、ウェトゥリアは‘vetus’（古い）に由来する「年離れた女性」を表し、ウォルムニアはおそらく性的成熟を意味する‘\*volup’を語源とし、女神ウォルムナヤルキア・ウォルムニア（後述）とも相通ずる、「生殖力を持つ女性」を表す言葉であるとする。さらにまた彼は、女たちの使節を組織したヴァレリア（‘valere’〔力強い〕に由来する）は「元気な処女」を表すとし、これら三人は要するに女性の機能的発展の段階を象徴する存在であるとする。そしてこうした理解に基づきつつ、結局フォルトゥナ・ムリエブリスの本質は若い女性と成熟した女性を象徴する後二者（ヴァレリア、ウォルムニア）に投影されているとの認識を示す<sup>34)</sup>。以上のガジェの見解はきわめて創見に満ち興味深い。しかし他の状況証拠に照らしてやや説得力を欠く部分がある。第一に、J・シャンポーも指摘するように<sup>35)</sup>、物語において英雄と対峙する中心人物はあくまでウェトゥリアとウォルムニアである。このうちウェトゥリアが実はフォルトゥナ・ムリエブリス信仰にあって異分子的要素であり、むしろヴァレリアが主役であるとの主張は、少なくとも物語の筋立ての観点から見ると強引の感を否めない。またさらにリウィウスやディオニュシオスの記述を素直に読む限り、ウェトゥリアの老齢がことさら強調されているような印象は受けない。そこで強調されるのは、彼女の子の母としての側面であり、母が子に及ぼす感化力の大きさである。第二に、ローマには古くから別種のフォルトゥナとして、フォルトゥナ・ウィルゴが祀られていた<sup>36)</sup>。もしこれとフォルトゥナ・ムリエブリスが

相補的な関係にあったとするなら、前者はその名（‘*virgo*’ [処女]）が示す通り成熟前の女性を、後者は成熟後の女性を保護する神であったと解するのが合理的である。このことは、フォルトゥナ・ムリエブリスの祭儀にあって「新婚女性（*neogamos*）」に特権的な役割が帰せられたとするディオニュシオスの証言（*Dionys.8.56.4*）とも整合するように思われる<sup>37)</sup>。かかる観点からも、ウェアリア=処女を同神の本質の一つと見なすガジェの主張は退けられるであろう。

一方シャンポーは、ガジェの考え方の方向性を受け継ぎながらも独自の異なった見方を示す。それは、ウォルムニアとウェトゥリアはフォルトゥナ・ムリエブリスの二体の像の顕現に他ならないとする説である。シャンポーはこれをとりわけウォルムニアについて、次の二つの論拠でもって証明しようとしている。すなわち、①プルタルコスの記事の中にウォルムニア（ただし伝記作家はこれをコリオラススの母の名前としている）が家で二人の子を抱いて座る情景が描かれるが（*Plut.Cor.33.4*）、これは幼子ユビテルとユノを膝に乗せた、プラエネステのフォルトゥナ・プリミゲニアの像を髣髴させるものであり、おそらくフォルトゥナ・ムリエブリス像二体のうち一体の所作を反映していると思われる。②ウォルムニアの名前は、ガジェが指摘するように、明らかに女神ウォルムナヤルキア・ウォルムニアと関係している。ウォルムナおよびルキア・ウォルムニアの実体は明らかでないが、しかしわずかな史料から母性を象徴する神ないし神的存在であることが推定できる<sup>38)</sup>。こうしたシャンポーの理解は一つの考え方として成り立ちうるが、私見ではやはりまだ仮説の域を出ていないように思われる。第一の論拠に関して言えば、同様な記述がリウィウスや、特にプルタルコスが『コリオラスス伝』を書くにあたり依拠したディオニュシオスに見られないというのは、非常に弱い点である。問題の箇所は伝記作家の作文と解していっこう差し支えないだろう。またプルタルコスに現れる件のウォルムニアの姿は、なるほどフォルトゥナ・プリミゲニアと似てなくはないが、しかしすっかり同じではない。後者はユビテルに乳を含ませているが、前者はそのようには描かれていないのである<sup>39)</sup>。第二の論拠もまた脆弱である。シャンポーはウォルムナおよびルキア・ウォルムニアを子供の保護神であるとするが、この見解はほとんどもっぱらアウグスティヌスのある一節（*Augustin.civ.4.21*）に基づいている。そこには、誕生と成長の過程で子供にさまざまな徳を授ける神々の名前が列挙されており、その中に子供が「良きものを欲するよう」仕向ける神としてウォルムヌスとウォルムナの男女神も挙げられている（この神々の一覧はウェアロに拠ると考えられる）。だがこれらの神々は、それが体現する個々の徳に関係する範囲で子供にかかわるのであり、必ずしも子供の保護を「専門」にするわけではない。例えば一覧には戦いの神マルスやベッロナ、敬意の神ホル、金銭の神ペクニアなども現れるが、これらを一概に子供の保護神と呼ぶことはできないだろう。ウォルムナもまた（アウグスティヌスないしウェアロの解釈によれば）「良きもの」を司る神として<sup>40)</sup>、その範囲で子の養育にかかわったと見るべきである。

ガジェやシャンポーの説は、物語の女主人公たちとフォルトゥナ・ムリエブリス信仰を直接的に結び付けようとする試みであるが、十分立証に成功しているとは言いがたい。コリオラススの妻と母が女神の化身であるとの理解などは、やや穿ち過ぎの感がしなくもない。ただ、両説の批判的検討から少なくとも、物語においてウォルムニアやウェトゥリアの「母」——英雄の子の母、英雄の母——としての役割が強調されていることは確認されたように思う。そうした母性の強調が、同神のあり方と通じるところがあるのは確かだろう。

次に考察の二つ目の手がかりとなるのは、女たちの使節である。女性による戦争への介入と

いうモチーフは、フォルトゥナ・ムリエブリスとどのように関係しているのか。この問題を考える上で大いに示唆を与えるのが、ノナエ・カプロティナエ（無花果の七日）である。ノナエ・カプロティナエとはフォルトゥナ・ムリエブリス神殿の奉獻記念日の翌日7月7日に催された祭典であり、これまた非常に謎めいた習俗なのだが、断片的な史料証言よりそこでは次のような儀式が行われたことが知られる<sup>41)</sup>。

- ・市外に無花果の枝で小屋が作られ、そこで女たちにご馳走が振舞われる。女奴隷たちは男たちと冗談を言って戯れる。さらに集団に分かれて互いに叩き合ったり、石を投げ合ったりする (Plut. Rom.29, Cam.33)。
- ・女たちは無花果の木の下でユノ・カプロティナに犠牲を捧げる。また無花果から切り取った枝を（何かのために）用いる (Varr. I.1.6.18)。
- ・ユノ・カプロティナに犠牲を捧げる際、無花果の乳液が用いられる (Macrob. Sat.1.11.40)。

まずこの祭典の主役は女性であるという事実が確認されてしかるべきだろう。加えてさらに、もし切り取られた無花果の枝が女奴隷たちの「叩き合い」に使われたのだとすれば、それは明らかにサトゥルナリア祭の山羊皮の鞭を連想させること、またユノ・カプロティナへの犠牲に際し無花果の乳液が用いられたことは、祭典の主目的が豊饒・多産の祈願であったことを暗示する。さて、興味深いのはノナエ・カプロティナエの起源をめぐる次のような話が伝えられていることである。いわゆるガリアの災厄（前390年頃）から間もなく、まだローマが国力を回復しきっていない時分にラテン人の軍隊が攻め寄せて来た。そして友好の証しにローマ人女性を多数差し出すよう要求した。ローマ人たちは、ピロティスないしトゥトラ（トゥテラ）という名の女奴隷の提案に従い、着飾った女奴隷たちを市民女性の身代わりとして敵陣に送り込んだ。彼女らは夜、敵が寝静まった頃合を見計らい、無花果の木より合図ののろしを上げた。これを受けてローマ人たちは打って出、敵を倒した。この出来事を記念して始められたのが、ノナエ・カプロティナエであるとされる (Plut. *ibid.*; Macrob. *ibid.*)。以上の話とコリオラヌスの物語との影響関係については問わないでおこう<sup>42)</sup>。いずれにせよ両者の間には興味深い共通点が見て取れる。それは、戦争の敗者の側から勝者の側へ女性が送り込まれる（引き渡される）という点である。勝者の気持ちを宥めるため、（成熟した）女性たちが敵陣へと赴く。そこには明らかにセクシャルな要素が見て取れる。なるほどウォルムニアやウェトゥリアはそのような目的でコリオラヌスのもとへ行くわけではないし、また物語において彼女たちのセクシャリティより母性が強調されていることはすでに述べた通りである。だが別の視点から見ると、彼女たちの使節にそうした側面が窺えることは否定できないだろう<sup>43)</sup>。同種のモチーフは、例えば有名な「サビニ人女性の略奪」の伝説にも見え、ローマ人の間でかなり一般的なものだったと考えることができる<sup>44)</sup>。

ノナエ・カプロティナエの起源譚は、St・ヴァインシュタインによるとギリシアの類似の伝承に由来するとされる<sup>45)</sup>。その伝来は何であれしかしここで重要なのは、豊饒・多産祈願のための祭典が女性による戦争への介入の話と結び付けられたことである。ローマ人は両者にある種の連関性を見いだしたわけである。出産と戦争というのは一見かけ離れた事象のように思えるが、必ずしもそうではない。出産は女性のみがなす偉大な行為である。同じように、祖国がまさに外敵に攻め取られようとする時、破滅的状况を打開する不可思議な力を彼女らは持つと見なされたのだろう。このように考えてみると、彼女たちの使節とフォルトゥナ・ムリエブリスとの関係も見えてくるように思われる。同神は子を産む者たる女性の守護神であり、か

つまた国境を守る神でもある。これらフォルトゥナ・ムリエプリスの二つの機能にかかわる話として、女性たちがその特有の力でもって国家のために自己献身を果たす物語が考案された。そのように考えられるのではないか。

さて、最後にフォルトゥナ・ムリエプリス神殿の起源譚が成立した時期について一考しておきたい。ごく大雑把な言い方をすれば、伝承の形成は神殿の奉獻年とされる前5世紀初頭よりあとであり、たまたもしそれがローマにおける歴史記述の開始以前に遡るとの前提に立つならば、前3世紀末より前ということになる。この約300年の間でさらに時期を絞り込むのはなかなか難しい。ただ、物語の女主人公たちの名は実在の氏族名に因むとする古典的解釈が（ガジェの批判にもかかわらず）なお有効であるとするなら<sup>46)</sup>、それは一つの指標となりうるかもしれない。まずウェトゥリウスは初期の有力なパトリキー氏族であり、前5世紀初めから前4世紀前半にかけて継続的に頭職の就任者を輩出した。その後前360年代を境にいったん政治の表舞台から消え去るが、家系そのものは存続し、前3世紀末に再びコンスルを送り出すに至る。ウェトゥリウス氏には同名の平民家系が並存しており、その中からウェトゥリウス・カルウィヌスが前4世紀後半にコンスル職に就くが（前334,321年）、彼の一族も間もなく凋落した<sup>47)</sup>。一方、ウォルムニウスは弱小なパトリキー氏族であり、記録では前461年にコンスルを一人出したことが知られるにすぎない。おそらく同氏は間もなく断絶したと思われる。その後同名の平民家系よりウォルムニウス・フランマ（前307,296年コンスル）が現れ、前4世紀末から前3世紀初頭にかけて活躍するが、しかし同家の成功は結局彼一代で終わった<sup>48)</sup>。こうして両氏族の活動時期を見比べると、最初は前5世紀前半に、その後前4世紀末から前3世紀初めあたりに重なり合いが見られる。伝承の形成時期として、前者がもし少々早すぎるとすれば、後者が一つの可能性として考えられるだろう。

#### IV. 物語の「古い層」——英雄伝説

コリオラス伝説の核心をなすのが英雄の悲劇的運命の話であることは言うまでもない。それは疑いなく初期の段階で形作られた、物語の最も古い要素である<sup>49)</sup>。英雄伝説がごく古いものであることは、歴史記述におけるその年代設定の作為性から明瞭に見て取ることができる。例えば、ローマ人のコリオリ攻めについて、リウィウスとディオニュシオスはともにこれをスプリウス・カッシウスとポストゥムス・コミニウスがコンスルの年（前493年）の出来事とする。そしてこの戦いを指揮したのはコンスルの一人コミニウスだったとしている。ところが史実の認定により批判的な目を持つリウィウスは、実際コミニウスとコリオリ攻めとのかかわりが史料上必ずしも明確ではないことを認めている。彼によると、同じ年もう一人のコンスル（カッシウス）はローマに留まり、ラテン人との条約締結に携わったことがフォルムの銅柱に刻まれた記録から知られる。このことから、国外へ赴き戦争を行ったのはコミニウスであることが間接的に推定されるにすぎない、というのである（Liv.2.33.9）。また、コリオラスの亡命とローマへの襲来について、両史家はそれぞれミヌキウス・アウグリヌスとセンプロニウス・アトラティヌスがコンスルの年（前491年）、およびスプリウス・ナウティウスとセクストゥス・フリウスがコンスルの年（前488年）に起きたこととしている。これらの年代がなぜこのように設定されたかは明らかでないが、いずれにせよ亡命からローマ襲来まで2年余りという間隔は、物語の進行にとっていささか間延びした長さである。リウィウスなどはそのた

め、自らの記述ではあえて中間の前490年と前489年のコンスル名を省略している。そして続く前488年のコンスルの名前を、コリオラスのローマ進軍について語る中で「すでにスプリウス・カッシウスとセクストゥス・フリウスがコンスルになっていた」とさりげなく挿入している(2.39.9)。こうして彼は意図的に時間の経過を短縮することで(読者は当然カッシウスとフリウスをコリオラスが亡命した翌年のコンスルと見なすであろう)、物語の流れを滞らせないようにしているのである。かたやディオニュシオスは年代記的な方法により忠実である。彼は出来事の流れを年ごとに区切り、前490年には大競技会のやり直しが決まるいきさつを、前489年には大競技会の開催、ウォルスキのローマからの退去、コリオラスの進軍の開始を記す(Dionys.7.68-73; 8.1-5)。だがこうしたやり方の難点は、前490年の記述内容がどうしても材料不足のため薄くなってしまうことである。そこでディオニュシオスは当該部分に長々とした大競技会の情景描写を盛り込み、紙幅を埋めている。

英雄伝説は元々ローマで歴史が書かれる以前、口頭伝承の中で定まった日付を持たない——モムゼンの言葉を借りれば「無時間的な」——物語として成立した<sup>50)</sup>。しかしやがて歴史記述が始まりそこに取り込まれる過程で、それはローマ史の年代的枠組みの中に半ば強引に押し込まれることとなった。上に見たような物語のクロノロジーの不自然さは、こうした伝説形成の経緯によっていると考えられる。さて、ではそもそも口承段階において英雄伝説の原型はどのように形作られたのだろうか。これは直接的な史料を欠き、答えるのがそう簡単ではない問題である。すべては状況証拠に基づいた蓋然性の議論とならざるをえないが、以下先行研究の導きに従いつつ若干の試みをしてみたい。

考察の糸口となるのは、コリオラスが亡命後あろうことか敵軍の将となり祖国を攻め苛むという、物語の展開の異様さである。同じく亡命を余儀なくさせられた共和政初期の伝説的英雄フリウス・カミルスは、怨念に囚われることなく、ガリア人に襲われた祖国を救援すべく馳せ参じた。コリオラスの物語で主人公はなぜ、こうした偉人にふさわしい態度を取らなかったのか。つとにW・シュールにより提唱され、おそらく今なお有効性を失っていないと思われるのが、この英雄は本来ローマ人ではなかったとする説である<sup>51)</sup>。これは一見突拍子もなさそうでいて、実際かなり合理的な解釈であると言える。物語において「コリオラス」の名は、主人公がコリオリ攻略に功をなしたことから付けられた「コリオリの征服者」の意味の添え名だとされる。だが征服地に因む添え名の習慣が一般化したのは、スキピオ・アフリカヌス(前201年)以降のことである<sup>52)</sup>。この種の命名習慣がいつ頃始まったかは(一説では前4世紀後半とされるが)<sup>53)</sup>必ずしも明確でない。いずれにせよ、コリオリはごく早くに廃れて「跡形もなく消滅」し(Plin.n.h.3.70)、史料にはほとんどコリオラス伝説との関連でのみ言及されるにすぎない都市である。そのような都市が、すでに人々の記憶からまったく消え去った時代に、物語の主人公の名の由来とされたとは考えにくい。それは前4世紀後半より前に遡る、かなり古い時期の伝承の名残と解してよいのではないか。もしそうならば、コリオラスが「コリオリの征服者」の意味であることはありえない。むしろこの地に名を与えた名祖「コリオリの祖」(デ・サンクティスの説)<sup>54)</sup>、あるいは単に「コリオリの人」と解釈するのが妥当であろう。コリオリはリウィウスやディオニュシオスの記述ではウォルスキの支配下の町とされるが(Liv.2.33.4-5; Dionys. 6.92.1)、アルデアとアリアキアの間付近というその位置関係から、またプリニウスの直接的な証言から(Plin.ibid.)、元来はラテン人都市であったと考えられる<sup>55)</sup>。このことから、コリオラスはかつてコリオリが所在した周辺のラテン諸都市、アル

デア、アリア、ラヌウィウムなどで崇拜された英雄だった可能性が推定される。

元々ラティウムの他地域で流布していた英雄伝説がローマで行われるようになったというのは、別の類例——ラウィニウムよりローマに導入されたと推測されるアエneas伝説の例<sup>56)</sup>——からしても十分ありうることに思われる。おそらくそれはラティウム地方がローマの影響下に置かれていく過程で起きたと考えられるが、詳しい状況はわからない。この点に関しシュールは次のようなきわめてユニークな説を提唱している<sup>57)</sup>。すなわち、アックス・マルキウス王を祖に戴くとされるマルキウス氏は、その実コリオリ周辺のラティウム地方の出であった。このことは、同氏から最初にコンスル（前357年）となった人物が「ルティルス」という、原初にアルデアを中心とする地域に居住したとされる先住民「ルトゥリ」を想起させる添え名を名乗ったことからわかる。コリオラス伝説はこの氏族の到来とともにローマにもたらされたのである、と。これはなかなか魅力的な学説だが、しかし残念ながら論拠の弱さを認めない。マルキウス・ルティルスが‘Rutulius’と綴られる例は碑文を含むどの史料にも見当たらないし、また逆に「ルトゥリ」を‘rutili’と表記する異型も存しない<sup>58)</sup>。「ルティルス」が「ルトゥリ」に通じると単純には言えないのである。添え名の「ルティルス」は、「クラッス（太った）」「カエクス（盲目の）」「ルフス（赤毛の）」などと同様、身体的特徴を表す一般形容詞‘rutulus’（赤毛の）にもっぱら由来すると解して差し支えないだろう。とはいえしかし、コリオラス伝説の招来と流布において、この氏族が重要な役割を担ったことはやはり疑いえない。英雄にマルキウスの氏族名が付与されたのは、伝説と同氏とのかかわり抜きには考えがたいからである。コリオラスとマルキウス氏との関係を直接語る史料は残されていないが、マルキウス王の子孫であることを大いに誇りとした同氏の構成員たちは、同じく王の子孫たるコリオラス（cf.Val.Max. 4.3.4）とのつながりを当然意識したはずである<sup>59)</sup>。マルキウス氏は前4世紀半ばに初めてローマの政界に参入した平民氏族であった<sup>60)</sup>。彼らは王の末裔を自称することで血統面での劣等性を補ったが、しかしその結果王の在位から数世紀にわたり一族の歴史に長い空白が生ずることとなった。そうした彼らにとって、外来の英雄はこの間隙を埋めるための格好の中継ぎとなったに違いないのである。

コリオラス伝説はまずマルキウス氏の構成員を中心に受け入れられ、やがて彼らの喧伝を通じより広範な人々に広まっていったと思われる。その後の状況についてはただ憶測を巡らすより他ない。一つの仮説として、次のような展開が考えられるかもしれない。英雄は王の血を継ぐ生粋のローマ人と見なされたが、他方でその外人としての出自がすっかり忘れ去られたわけではなかった。物語の伝来に対する記憶というのは案外根強いものである。ちょうどアエneas伝説がローマに導入され定着したのちも、トロイ人の英雄は最初ラウィニウムに到着したと語られ続けたように。そこで、このローマ人でありかつ外人でもあるという相反する要素を整合させるため、工夫が求められた。かくして、コリオラスは（トロイ人の子孫がラウィニウムよりアルバを経てローマへ至るのとは逆に）ローマを離れて他国へ移り祖国を脅かす存在になったとのストーリーが考案されたのである。その際、英雄の亡命先は（カミルスの場合のように）他のラテン人都市でもよかったはずだが、そうはならなかった。彼はラティウム地方南部で勢威を誇る異民族ウォルスキのもとへ赴いたとされた。これは、かつてこの民族がたびたび国境を脅かしローマ人を恐怖に陥れたことが、伝説形成期の人々にも印象深く伝え知られていたために他ならないだろう<sup>61)</sup>。

結 語

本稿ではコリオラス伝説の構成要素を、歴史記述の開始以前に形作られた「古い層」と、これよりのちに付け加わった「新しい層」とに分け、それぞれについて考察を行った。伝説の形成過程を要約すれば、まず核となる英雄伝説にフォルトゥナ・ムリエブリス神殿創建をめぐる物語が結合して「古い層」をなし、そこにさらに大競技会のやり直しや食糧危機、民会裁判などの話が新たな要素として加わったと思われる。この過程は長い年月をかけて進行したものであった。伝説の最終バージョンが出来上がったのは前1世紀であり、以後おそらくリウィウスやディオニュシオスの著作の影響も手伝ってそれは永続的に固定化された。これが伝説形成のいわば終着点である。一方出発点は悲劇的英雄の物語がローマで広まった時点に置かれるだろうが、それは年代的に言うとも前4世紀後半頃だったと考えられる。このことは、外来の英雄の導入と流布に大きな役割を担ったであろうマルキウス氏が、同世紀の中頃に台頭した家系であることから推定される。

ところで前4世紀後半というのは、ちょうどローマがイタリア中部における覇権を確立し、勢力をさらに南部へと着実に広げていった時期である。筆者はかつて旧稿において、この時期ローマ人の間で急速に国民意識が高まるとともに、国家（国民）の成立と発展にまつわる物語（「国民の歴史」）が形をなした、との見方を示した<sup>62)</sup>。もしこの見方が正しければ、コリオラス伝説の誕生もやはりそのような背景に位置づけて理解できるのではないと思われる。すなわちコリオラスは、ローマ国家の飛躍的拡大の開始期であり、かつローマ人の国民意識の伸長期でもある時代に生み出された国民的英雄の一人だった。この少しばかり大胆な推論を最後に提起し、稿を閉じることとしたい。

註

- 1) コリオラス伝説に関する基本的文献をまず挙げておくと、Th.Mommsen, *Die Erzählung von Cn. Marcus Coriolanus*, *Hermes*, 4 (1870) = id., *Römische Forschungen*, II, Berlin, 1879, 113 ff.; G. de Sanctis, *Storia dei Romani*, II, Torino, 1907 (2. ed. 1960), 103 sgg.; W. Schur, s.v. Marcus, *RE*, Suppl. V (1931), 653 ff.; R. M. Ogilvie, *A Commentary on Livy. Books 1-5*, Oxford, 1965, 314 ff.; E. Noè, *Ricerche su Dionigi d'Alicarnasso: la prima stasis a Roma e l'episodio di Coriolano*, in *Ricerche di storiografia greca di età romana*, Pisa, 1979, 21 sgg.; J.-M. David, *Les étapes historiques de la construction de la figure de Coriolan*, in M. Coudry/Th. Späth (eds.), *L'invention des grands hommes de la Rome antique*, Paris, 2001, 17 sqq.
- 2) リウィウスの関連の記述 (2.33-40) は比較的簡潔なのに対し、ディオニュシオスはこの話題に異様なほど多くの紙幅を充てている (6.72-4, 7.21-67, 8.1-62, etc.)。ディオニュシオスの史書の特徴およびそこにおけるコリオラスの物語の位置づけに関しては、Noè, *Ricerche su Dionigi d'Alicarnasso* 参照。かたやシェークスピアの典拠ともなったプルタルコス『コリオラス伝』は、記述の分量は多いが、ほぼすべての材料をディオニュシオスに負っている。Cf. Mommsen, *Römische Forschungen*, 116 f.; Ed. Schwartz, s.v. Dionysios, *RE*, X (1903), 943. より詳しい分析は、cf. D. A. Russell, *Plutarch's Life of Coriolanus*, *JRS*, 53 (1963), 21 ff.
- 3) デイオニュシオスとプルタルコスのみコリオラスの個人名を「ガイウス」と、他の史料はすべて「グ

ナエウス]と伝える。

- 4) ここでは両史家の記述内容が明白に食い違う箇所のみ取り上げる。ディオニュシオスでは語られるがリウィウスでは語られない、という類の差異の事例（例えばコリオラスのアンティウム攻め、ウェアリアの活躍など）に関しては、Mommsen, *Römische Forschungen*, 127ff. 参照。後者の事例は両史家の全体的な記述量の違い（註2参照）に因るところが大きいだろう。
- 5) Ogilvie, *A Commentary on Livy*, 331f. デイオニュシオスがコリオラスは自らの裁判に出席したとしていいるのもまた（表の(2)）、同様と思われる。彼はおそらく物語をより劇的にするため、典拠の記述を改変したのである。有罪判決が見込まれる場合、被告は結審前に自主的に亡命するというのがローマ人の一般的慣行であった。
- 6) 祭典のやり直しの慣行に関しては、ひとまず W.Eisenhut, s.v. *instauratio*, *RE*, Suppl. XIV (1974), 197ff. 参照。
- 7) カピトルのファスティ (*Fasti Capitolini*) の編年に則れば前279年、ウェアロの編年に則れば前280年となる。マクロビウスがどちらの編年を用いているかに関しては、F.Bernstein, *Ludi publici*, Stuttgart, 1998, 91 Anm. 382 参照。
- 8) Ogilvie, *A Commentary on Livy*, 327.
- 9) より詳細な分析は、cf. Bernstein, *Ludi publici*, 91ff.
- 10) リウィウスはやり直しの対象となったのがどの競技会なのか、明確に述べていない。彼の年代設定によると、レギルス湖畔の戦いは前499年に行われたとされる (Liv. 2.19-20)。この年代とやり直しが決まった年（前490年）の間では、間隔が開きすぎる。
- 11) Bernstein, *Ludi publici*, 93.
- 12) いずれにせよ、競技会のやり直しの話を物語の原初的要素と見なすモムゼンの見方は成り立たないだろう、Mommsen, *Römische Forschungen*, 145.
- 13) de Sanctis, *Storia dei Romani*, 103.
- 14) Cf. Ogilvie, *A Commentary on Livy*, 256f.; P.Garnsey, *Famine and Food Supply in the Graeco Roman World*, Cambridge, 1988, 167ff.; T.J.Cornell, *The Beginnings of Rome*, London/New York, 1995, 167ff.
- 15) Cf. G.Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, München, 1912 (2.Aufl.), 297f.; Ogilvie, *A Commentary on Livy*, 321. デイオニュシオスによると、ローマ人に穀物を用立てたのはシュラクサイの僭主ディオニュシオスであると、リキニウス・マケルやグナエウス・ゲッリウスは述べているとされる。だがこの僭主は物語から約百年後の人物であり（在位前405-367年）、時代が合わない。そこでギリシア人史家は、僭主の名前をグラのゲロンに置き換えるべきと提案する (Dionys. 7.4-6)。W・シュールはこれを無用な説明とする (*RE*, Suppl. V, 656)。彼によれば、僭主名こそ古記録に由来する真正の情報であり、よってこの出来事は実際には前4世紀初めに起きたことであるという。一考に値する見解だろう。
- 16) Mommsen, *Römische Forschungen*, 128; David, *Coriolan, figure fondatrice du procès tribunicien, la construction de l'événement*, in *L'invention des grands hommes* (註1), 250sq. コリオラスが裁判に出席したかどうかをめぐる両史家の記述の違いについては、註5参照。
- 17) L.Thommen, *Das Volkstribunat der späten römischen Republik*, Stuttgart, 1989, 189ff.
- 18) Thommen, *Das Volkstribunat*, 187ff.
- 19) David, *Coriolan, figure fondatrice*, 263sq. スラの法の解釈をめぐることは多々議論がある。ひとまず、E.Gabba, *Appiani civilium bellorum liber primus*, Firenze, 1967 (2.ed.), 171sg. 参照。
- 20) 被告の自主的な亡命（註5）は元来「移住」と見なされたが (Mommsen, *Römisches Strafrecht*, Leipzig, 1899, 68f.)、ローマ刑法史の通説的理解によれば、スラの法は亡命者に事後的に「水火の



## コリオラス伝説考

- 禁]を課すことで、これを刑罰に変えたとされる、cf.B.Santalucia,*Diritto e processo penale nell'antica Roma*,Milano,1998 (2.ed.) ,181sgg.ただしコリオラスの追放刑に言及しているのはディオニュシオスのみであり、これが彼の創作である可能性は高い。
- 21) David,Coriolan,figure fondatrice,262.
  - 22) この点で、とりわけリキニウス・マケルの著作が及ぼした影響力は大きかったと思われる（マケルについてはひとまず、Ogilvie,*A Commentary on Livy*,7ff.; H.Beck/U.Walter,*Die frühen römischen Historiker*,II, Darmstadt,314ff.参照）。共和政初期に関する史書の記述は、あらゆる事象を身分闘争に絡めて描く嫌いがある。その信憑性は個々の事象ごとに検証する必要がある。
  - 23) 女性たちの物語がまったくのギリシア由来の話であるとする説は、今日もはや受け入れられないだろう、cf.M.Bonjour,personnages féminins et la terre natale dans l'épisode de Coriolan,*REL*,53 (1975) ,171sq. もちろん脚色の過程でそうした要素が取り入れられたことは十分ありうる。
  - 24) ウァレリアの活躍ぶりはディオニュシオスにおいて詳しく語られるが、リウィウスでは完全に省略されている（註4参照）。
  - 25) A.Alföldi,*Das frühe Rom und die Latiner*,Darmstadt,1979（英語版初版1965）,267f.
  - 26) Alföldi,*Das frühe Rom*,266; S.Quilici Gigli,Considerazioni sui confini del territorio di Roma primitiva,*MEFRA*,90 (1978) ,570. クラウディウス街道5マイル地点で行われたロビガリア（作物のさび病を防ぐ神ロビグスの祭り）など、前記以外のありうる事例については、cf.Alföldi,*Das frühe Rom*,266ff. クルウィリウスの溝もまたローマ領域の境界の一つであったかどうか、確かではない（Ogilvie,*A Commentary on Livy*,107はこれを先史時代の灌漑用の排水路だろうとする）。そうだったと考えるのは、Quilici Gigli,Considerazioni,568sg.
  - 27) W.Otto,Iuno,*Philologus*,64 (1905) ,192ff.
  - 28) Babelon,*Monnaies de la république romaine*,II,Paris,1886,412 = H.Mattingly, *Coins of the Roman Empire in the British Museum*,I, London,1923,1f.
  - 29) Wissowa,*Religion und Kultus*,259. オットーもこの批判に同意する、Otto,s.v.Fortuna,*RE*,VII (1910) ,23.
  - 30) J.Champeaux,*Fortuna.Le Cult de la Fortune à Rome et dans le monde Romain*,I,Rome,1982, 151sq.
  - 31) Cf.Champeaux,*Fortuna*,347.
  - 32) ロビガリア（註26）もまた同様。
  - 33) Mommsen,*Römische Forschungen*,149f.
  - 34) J.Gagé,Lucia Volumnia,déesse ou prêtresse (?) ,et la famille des Volumnii,*RPh*, 35 (1961) , 29sqq.; id., *Matronalia.Essai sur les dévotions et les organisations culturelles des femmes dans l'ancienne Rome*,Bruxelles,1963, 48sqq.; id.,*La chute des Tarquins et les débuts de la république romaine*,Paris,1976,172sqq.
  - 35) Champeaux,*Fortuna*,340sqq.
  - 36) プルタルコスがセルウィウス・トゥリウス王が‘Tyche Parthenos’（=Fortuna Virgo）の神殿を奉獻したと伝える（*quaest.Rom.*74;*fort.Rom.*10）。神殿が所在した場所は明確ではない、cf.T.Aronen,s.v.Fortuna Virgo,*Lex.Top.Urb.Rom.*,II (1995) ,279sg.
  - 37) つまり新婚女性は同神の祭儀に初めて加わった新参であるということ。なお、ディオニュシオスは同じ箇所で、二度結婚した女性は祭儀に与れないとも述べているが、この一節をめぐる議論にここでは立ち入らない。
  - 38) Champeaux,*Fortuna*,342sqq.,351. ウェトゥリアに関しては具体的な議論がなされていないように思われる。

- 39) フォルトゥナ・プリミゲニア像の幼子ユピテルは「ユノともどもフォルトゥナの膝に座って乳を飲み、その乳房を求める (lactens cum Iunone Fortunae in gremio sedens mammam appetens)」姿たったとされる (Cic. *div.* 2.85)。「乳を飲み」かつ「乳房を求める」というのは一見矛盾するので、前者を削除すべきとする見方もある。いずれにせよ、プルタルコスが描く情景とは異なる。
- 40) ウァロも結局ウォルムナ (ウォルムヌス) の名前 (< volo) から、すでに忘れ去られた神の性質を憶測しているにすぎない、cf. Eisenhut, s.v. Volumnus, *RE*, IX A.1 (1967), 885f.
- 41) ノナエ・カプロティナエの一般的説明として、Wissowa, *Religion und Kultus*, 184f.; St. Weinstock, s.v. Nonae Caprotinae, *RE*, XVII (1936), 849ff.; H. H. Scullard, *Festivals and Ceremonies of the Roman Republic*, London, 1981, 161ff.
- 42) 7月6日と7日とで連続するノナエ・カプロティナエ、フォルトゥナ・ムリエプリス奉獻記念日、さらに7月5日のポプリフギアの関係については多くの議論がある。ひとまず Weinstock, *RE*, XVII, 857ff.; Champeaux, *Fortuna*, 363sq. 参照。
- 43) Champeaux, *Fortuna*, 365sq.
- 44) ギリシアやアイルランドなどの伝説にも見える、かなり普遍的なモチーフである、cf. Weinstock, *RE*, XVII, 851f.; Champeaux, *Fortuna*, 366sq.; K. Mustakallio, Some Aspects of Coriolanus and the Women behind the Cult of Fortuna Muliebris, in H. Solin/M. Kajava (ed.) *Roman Eastern Policy and Other Studies in History*, Helsinki, 1990, 129. そうした行為が現実になされた事例も知られる。カエサルによると、ローマ軍がゲルゴウィアを包囲した際、同市の女たちは胸をはだけて宥を乞い、中には城壁より下りて敵兵に身を委ねる者もあったという、Caes. *b.G.* 7.47.5.
- 45) Weinstock, *RE*, XVII, 852.
- 46) 古典的解釈を依然認めるのは、M. Bonjour, *personnages*, 160; David, *Les étapes historiques*, 22.
- 47) ウェトゥリウス氏に関しては、cf. H. Gundel, s.v. Veturius, *RE*, VIII A.2 (1958), 1880ff.; I. Shtatzman, *Patricians and Plebeians: the Case of the Veturii*, *CQ*, 23 (1973), 65ff.
- 48) ウォルムニウス氏に関しては、cf. Gundel, s.v. Volumnius, *RE*, IX A.1 (1967), 873f. 同氏が一貫して平民家系であったとする見方 (e.g. Gagé, *Lucia Volumnia*, 31) には同意できない、拙著『共和政ローマの寡頭政治体制』ミネルヴァ書房、2005年、41頁以下参照。
- 49) コリオラススの物語が宴会の歌謡 (carmina convivalia) として歌い継がれたものかどうか、定かではない。そうした可能性を唱えるのは、A. Momigliano, *Perizonius, Niebuhr, and the Character of Early Roman Tradition*, *JRS*, 47 (1957) = id., *Secondo contributo alla storia degli studi classici*, Roma, 1960, 69ff.; Cornell, *The Beginnings of Rome*, London/New York, 10ff.; David, *Les étapes historiques*, 21.
- 50) Mommsen, *Römische Forschungen*, bes. 136ff.
- 51) Schur, *Fremder Adel im römischen Staat der Samniterkriege*, *Hermes*, 59 (1924), 452f.; id., *RE*, Suppl. V, 658. (前者の論考でシュールはコリオラススをウォルスキ起源とするが、後者ではラティウム起源と見解をあらためている。) 同様な見解はすでにデ・サンクティスにより示唆されている、de Sanctis, *Storia dei Romani*, 105sg. コリオラススを「辺境居住者」と呼ぶガジェの見方も、これに近いと言えるだろう、Gagé, *La chute des Tarquins*, 174. 外人説に同意するのは、Bonjour, *personnages féminins*, 162sq.; David, *Les étapes historiques*, 19. 関連して、T・J・コーネルが近年提起した説を紹介しておきたい。それによると、アルカイク期のイタリア中部では貴族の軍事指導者を中心とした数々の私兵集団が跋扈していた。サビニの有力者アットゥス・クラウススやクレメラ河畔の戦いで全滅したと伝えられるファビウス氏の一族、またサトリクム碑文に記されたポプリオス・ウェアシオス (ウェアリウス・ポプリコラ) の「兄弟団」

## コリオラス伝説考

などはその一例である。コリオラスはまさにそうした当時の私兵集団の指導者を投影する存在に違いないとされる (Cornell, *The Beginnings of Rome*, 143f)。これは一つのありうる推論と思われる。ただし、伝承で語られるファビウスやポプリコラは自国に背いた「反逆者」ではない。共和政初期のローマ国家において、貴族が私兵集団の長として時にそうした行動を取りえたかどうかについて、筆者は否定的な見方を持っている (前掲拙著、64-5頁参照)。E・ノエはコリオラスの私兵集団を前1世紀のいわゆる「兵士クリエンテラ」の投影と見なす、Noè, *Ricerche su Dionigi d'Alicarnasso*, 93.

- 52) リウィウスはスキピオがこの種の添え名を名乗った最初の人物であるとする、Liv.30.45.6.
- 53) モムゼンはルキウス・アエミリウス・プリウエルナス (前329年コンスル) が初出の例であるとする、*Römische Forschungen*, 144 (cf.H.Klebs, s.v.Aemilius, *RE*, I (1894), 572) . 「プリウエルナス」を征服に因む添え名と見なすことに懐疑的なのは、E.T.Salmon, *Historical Elements in the Story of Coriolanus*, *CQ*, 24 (1930), 96n.9 (cf. *Der neue Pauly*, 1 (1996), 180) .
- 54) de Sanctis, *Storia dei Romani*, 106.
- 55) Chr.Hülse, s.v.Corioli, *RE*, IV (1900), 1234f.; Ogilvie, *A Commentary on Livy*, 319.
- 56) 拙稿「古代ローマにおける「国民的」歴史認識の形成」『岩手大学文化論叢』第5輯、2002年、44頁以下参照。
- 57) Schur, *RE*, Suppl.V, 658. 同意するのは、Bonjour, *personnages féminins*, 163.
- 58) Cf.F.Münzer, s.v.Marcus, *RE*, XIV (1928), 1589f.; *Oxford Latin Dictionary*, Oxford, 1982, 1672f.
- 59) こうしたマルキウス氏構成員の自意識が最もよく見て取れるのは、マルキウス王の肖像を刻んだ貨幣の図像においてである (Crawford, *RRC*, No.346, 425)。同氏と王のかかわりについて、詳しくは J.Van Ooteghen, *Lucius Marcius Philippus et sa famille*, Namur, 1961, 7sq. 参照。
- 60) Cf.Münzer, *RE*, XIV, 1535ff.
- 61) コリオラスの進軍経路に挙げられる地名 (I、表の(4)参照) は、ウォルスキとの戦いにまつわる史実を反映したものであるかもしれない、cf. de Sanctis, *Storia dei Romani*, 106sg.; Salmon, *Historical Elements*, 99f. フォルトゥナ・ムリエプリス神殿創建の背景にウォルスキとの対抗関係を見て取る説もある、cf. Champeaux, *Fortuna*, 370sq.; F.Coarelli, *Roma, i Volsci e il Lazio antico*, in *Crise et transformation des sociétés archaïque de de l'Italie antique au Ve siècle av.J.-C.*, Rome, 1990, 151sg.
- 62) 「古代ローマにおける「国民的」歴史認識の形成」、55頁以下参照。